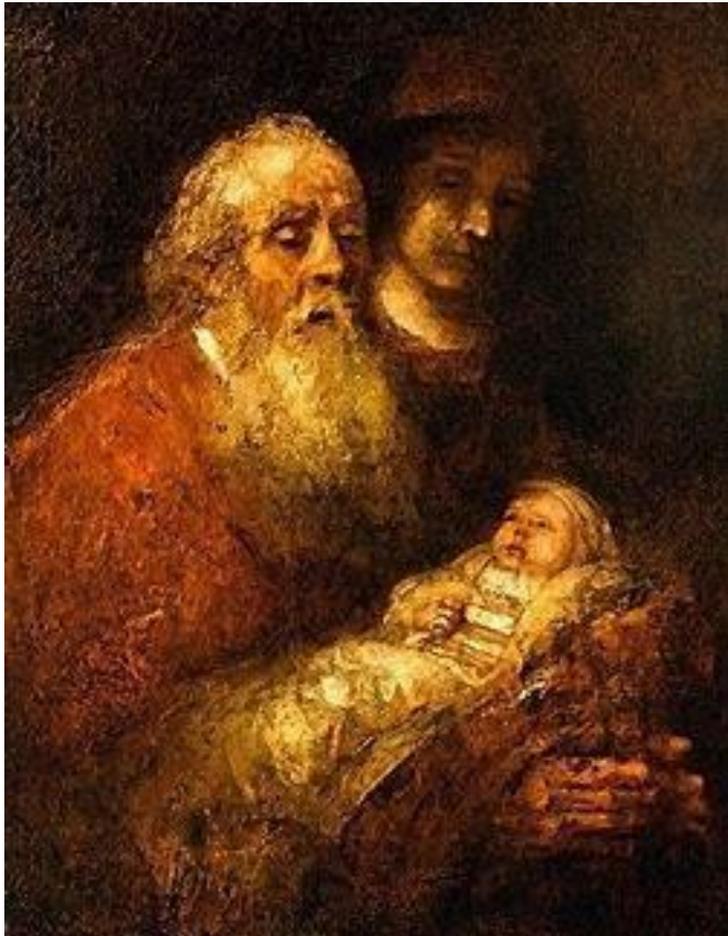


2023年12月24日 説教「異邦人を照らす光」

ルカの福音書2章21～35節

皇帝アウグストの時代に住民登録をせよという勅令がくだり、ヨセフとマリヤもベツレヘムに向かいました。身重のマリヤは馬小屋と思われる場所で男子を出産しました。その頃、郊外にいた羊飼いたちのところに、御使いが現れて、救い主がお生まれになったことを告げました。羊飼いたちは町に出かけ、赤子がいる所を捜しあてました。彼らは、御使いに告げられた通りのことが起こされていることを見て、神を賛美して帰って行ったのでした。



1. ヨセフとマリヤは幼子をささげるために (21～24節)

- ①割礼を施す日 (21)「八日が満ちて幼子に割礼を施す日となり、幼子はイエスという名で呼ばれることになった。胎内に宿る前に御使いがつけた名である。」

アブラハムの時代から、ユダヤ人の定めとしてあったのが、赤子誕生から八日目に割礼を施すことでした(創世記 17 章)。マリヤから生まれた赤子には、御使いから告げられたとおり(1:31)、イエスとつけられることになりました。

- ②エルサレムへ (22)「さて、モーセの律法による彼らのきよめの期間が満ちたとき、両親は幼子を主にささげるために、エルサレムへ連れて行った。」

「きよめの期間」というのは、33 日間です。ですから生誕後約 40 日後に(レビ記 12 章参照)ヨセフとマリヤはイエスを主にささげるために、ベツレヘムから北に 8 キロ程のエルサレムまで出かけて行ったのです。

- ③山鳩一つがい (23～24)「—それは、主の律法に『母の胎を開く男子の初子は、すべて、主に聖別された者、と呼ばなければならない。』と書いてある通りであった— また、主の律法に『山鳩一つがい、または、家ばとのひな二羽』と定められたところに従って犠牲をささげるためであった。」

ヨセフたちがエルサレムに出かけて行ったのは、赤子の聖別を受けるためでありました(出エジプト 13 章)。聖別を受ける時には子羊をささげる人がいる一方、経済的余裕がない人は山鳩一つがい、家鳩のひな二羽をささげることになっていました(レビ記 12 章)

2. 救い主を見たシメオン (25～節)

- ①シメオン (25)「そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルの慰められることを待ち望んでいた。聖霊が彼の上にとどまっておられた。」

一方、エルサレムにはシメオンという敬虔な預言者と言って良い、老人がいました。彼は信仰が篤く、多くの人々が救い主の来臨の約束を半ば期待していないなかで、救い主の来られるのを熱心に待ち望んでいる人でした。それは、聖霊が彼の上にとどまっているからでした。

- ②救い主と会う (26～27)「また、主のキリストを見るまでは、決して

死なないと、聖霊のお告げを受けていた。彼が御霊に感じて宮に入ると、幼子イエスを連れられた両親が、その子のために律法の慣習を守るために入って来た。」

シメオンには聖霊からの御告げが与えられていました。それは、キリスト(救い主)を見るまでは決して死なないというものでした。そんな彼が御霊に導かれて宮に入りました。すると、そこに幼子イエスを連れられたヨセフとマリヤがやって来ました。律法の実行によるものでした。

③幼子を抱き(28~29)「すると、シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。『主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです。』

シメオンは夫妻の抱く幼子を見た瞬間に霊的閃きを与えられたのでしよう。その子を腕に抱いて、神をほめたたえたのです。それは彼が確信し、生きる望みであったことが実現した時でした。そして、「シメオンの賛歌」と言われる言葉が述べられるのです。『主よ。今こそしもべを、安らかに天にお招きくださっているのですね。お約束くださったとおり、しもべは救い主である方の尊顔を仰いでいるからです。』

3. 両親への祝福と預言(31~35節)

①啓示の光(31~32)「『御救いはあなたが、万民の前に備えられたもので、異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの光栄です。』」

「『この方からの御救いは、万民のために備えられたもの。そして、その御救いは異邦人にももたらされる啓示の光なのです。また、神の民であるイスラエルにとっては光栄となる方です。』」

②驚く両親(33)「父と母は幼子についていろいろ語られる事に驚いた。」

ヨセフは御使いから「マリヤの胎に宿っているものは聖霊によるのです」(マタイ1章)と告げられていました。また、マリヤには受胎告知とねんごろなる御使いの言葉が伝えられて、それを受け入れていました(ルカ1章)。しかし、そんなことを何も知らない老シメオンがこの幼子が救い主であると語るのを聞くに及んでは、改めて驚いたのです。

③マリヤへのメッセージ(34~35)「また、シメオンは両親を祝福し、母マリヤに言った。『ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れ、また立ち上がるために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。剣があなたの心さえも刺し貫くことでしょう。それは多くの人の心の思いが現れるためです。』

シメオンは両親を祝福しました。その上で、特に母マリヤに向かって伝えました。つまり①この子を、イスラエルの多くの人が否定する ②一方、救われる人がいる。③この子は迫害を受けるしるしとなる ④迫害によって、マリヤ自身の心をさえ刺し貫くこともある ⑤それは人間の罪が露わにされるためなのだ。⑥この幼子を通して救いが人間にもたらされるため、十字架につくことになる。これらのことを、シメオンは預言したのです。

《結論》 今朝の聖書箇所から三つのことを学びたいと思います。

第一は、シメオンについてです。彼は聖霊から、キリストを見るまでは死なないというみ告げを受けていました。それは実現しました。ヨセフとマリヤが抱いている赤子こそが救い主であることを確信し、その子を抱いて神を賛美しました。主の祝福であり、人生のハイライトでした。彼はその日に至るまで、毎日救い主と出会うことを願い求めてきました。それは人生の目標でもありました。だからといって、日々の仕事を疎かにしたわけではありません。「彼は敬虔な人」という言葉にあるように、日常生活において、淡々と主を見上げながら歩んでいたのです。私たちの生活においても、主にあって与えられている大きな目標があるでしょう。しかし、日常生活を忠実に行ってこそ、それは備えられてくるのです。老シメオンの生き方は老人はもちろん、若者も学ぶべきでありましょう。

第二はシメオンが若い夫婦に向かって語らせられた内容からです。その中に、「御救いはあなたが、万民のために備えられたもので、異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの光栄です。」とあります。先週のアドベント礼拝ではイザヤ書42:1-4を学びました。そこには「彼は国々に公義をもたらす。彼は衰えず、くじけない。…島々も、その教えを待ち望む」とありました。「国々」「島々」とある部分は、マタイの福音書12章の引用では「異邦人」とあります。キリストご降誕の時代の多くのユダヤ人達は神の民はユダヤ人だけだと考えていました。そうした中でシメオンに、「異邦人を照らす啓示の光」である方が来られるというビジョンが与えられたのです。つまり、救い主である方の誕生は異邦人を含む神の民のためであると預言されたのです。救い主は、「傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともない」のです。苦しむ異邦人にも救いと癒しを与えてくださるというメッセージを語り告げたのです。シメオン自身、それがどのような意味を持つかわからなかったでしょう。しかし確かに、異邦人の救いが語られていたのです。異邦人クリスチャンとして、主に感謝し、救い主のご降誕を喜んでいきましょう。

第三に、シメオンがヨセフとマリヤを祝福した後に、マリヤに向けて特別に語られた内容についてです。そこには、この赤子である救い主を通して、救われる者がいる一方、彼に対立したり、迫害をしたりする人々がいて、ついにはこの幼子が人々のために十字架につくようになることを暗示されていました。なぜ、このようなことが語られたのでしょうか。それはマリヤがその子を聖霊によって身ごもった母であるからでしょう。シメオンがいかに理解していたかはわかりませんが、神は彼を通してマリヤに告げさせたのです。実際マリヤは、30数年後に十字架につけられて、死に至ったイエス・キリストの姿を、一部始終見ていました。そして、それを彼女なりに受け止めていました。マリヤはイエスが生まれた時から、救い主として生まれた息子の将来を覚悟させられたと言えましょう。私たちの歩みにも試練や困難があったとしても、私たちの救い主の誕生と十字架をと合わせて考え、祈りましょう。天来の平安が備えられます。この方が異邦人の光としてお生まれくださり、十字架まで歩まれたこと覚えて、礼拝をささげ救いの喜びを確かめていきましょう。